

西岩坂地区一般農道整備事業に伴う

真ノ谷遺跡発掘調査報告書

平成12(2000)年3月

島根県八雲村教育委員会

西岩坂地区一般農道整備事業に伴う

ま の た に
真ノ谷遺跡発掘調査報告書



平成12(2000)年3月

島根県八雲村教育委員会

序

平成8年度から15年度にわたる島根県松江農林振興センターの事業として、「西岩坂地区一般農道整備事業」が実施されることとなりました。

八雲村教育委員会では、島根県松江農林振興センターの依頼によって、西岩坂地区一般農道整備予定地内にある遺跡の有無確認調査及び本発掘調査を平成8年度より実施しています。

本報告書は平成10年度に実施した真ノ谷遺跡の発掘調査成果をとりまとめたものです。

平成10年9月より開始しました現地調査は、島根県教育庁文化財課の指導を頂きながら慎重に実施しました。本調査は、八雲村教育委員会が、多数の村民の方々の熱心なご協力を頂きながら発掘を進めました。

この調査では、加工段1段、焼土坑1個、落とし穴2個と多数のピットが発見され、貴重な研究資料を得ることができました。

本調査によって、当時の状況が漸次明らかになって参ることは、まことに喜ばしいことではありますが、貴重な文化遺産が消えていくことに関しましては、誠に心寂しいものを覚えます。

本調査を実施するにあたりまして、東森市良先生のご指導はもとより島根県教育庁文化財課から賜りましたご指導、ご助言、また、直接発掘調査にご協力いただきました多数の村民の皆様衷心より敬意と感謝の意を表します。

平成12年3月

八雲村教育委員会

教育長 泉 和 夫

例 言

1. 本書は、鳥根県松江農林振興センターの委託を受けて、八雲村教育委員会が平成10(1998)年度に実施した、西岩坂地区一般農道整備予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2. 本書で取り扱う遺跡の名称、所在地及び面積は次の通りである。

真ノ谷遺跡	鳥根県八東郡八雲村大字西岩坂 3769-3 番地外
範囲確認調査	47 m ²
本発掘調査	436 m ²

3. 調査組織は以下の通りである。

[平成10年度] 現地調査

調査主体	八雲村教育委員会 教育長 佐原通司(前任) 泉 和夫(後任)
調査指導者	東森市良(八雲村文化財保護審議委員) 守岡正司(鳥根県教育庁文化財課主事)
事務局	教育次長 長島幸夫、藤山節子(嘱託)
調査担当者	川上昭一(社会教育係主任主事)
調査補助員	田中和美(臨時職員)、深津光子(臨時職員)
作業員	安部直義、安部当子、安部益子、石倉恒雄、石倉睦子、石原君子、石原政子、石原幸恵 子川育子、近藤仁一、下川久就、高尾万里子、藤原秀子、山根隆、山根利子
遺物整理	武田裕子

[平成11年度] 報告書作成

調査主体	八雲村教育委員会 教育長 泉 和夫
調査指導者	中村唯史(鳥根大学汽水域研究センター客員研究員)
事務局	教育次長 長島幸夫(前任) - 三好 淳(後任)、藤田節子(嘱託)
調査担当者	川上昭一(社会教育係主任主事)
調査補助員	田中和美(臨時職員)、深津光子(臨時職員)
遺物整理	高尾万里子、武田裕子

4. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては以下の方々から有益なご助言を頂いた。記して感謝の意を表する。()内は平成11年現在。

西尾克己(鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター)

丹羽野裕()

5. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。
SK -土坑、Pt -柱穴
6. 本書で使用した方位は磁北を示す。
7. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行のものを使用し、「調査区配置図」は鳥根県松江農林振興センターの工事図面を浄書して使用した。
8. 土壌および遺物の色調には農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1996年版を参考にした。
9. 「位置と周辺の遺跡」の遺跡番号は鳥根県教育委員会発行の『増補改訂鳥根県遺跡地図』I（出雲・隠岐編）1993年3月と対応している。
10. 石器の石材については「文化財調査コンサルタント株式会社」に鑑定を委託した。
11. 本報告書の編集と執筆は、上記の調査指導者や協力者の指導と助言を得ながら調査員が協議して行った。
12. 本遺跡出土遺物及び調査記録は八雲村教育委員会で保管している。

目 次

I 位置と環境	1
II 調査に至る経緯	3
III 調査の経過	3
IV 遺跡の概要	6
1. 加工段	8
2. SK-01	12
3. SK-02	12
4. SK-03	13
5. Pt-37	13
6. 遺構外出土遺物	14
V 小 結	16

I 位置と環境

八東郡八雲村は松江市の南郊、東経133°、北緯35°に位置し、東を八東郡東出雲町、西を大原郡大東町、南を能義郡広瀬町に囲まれた東西8km、南北10km、面積約55.41km²の山村で、総面積の80%以上が山林にあたる。村の中央を意宇川が北流し中海に注いでおり、これに流れ込む数本の小河川が合流する下流部に平野が展開している。

遺跡は第2図でみられるように、これらの川と平野を取り囲む地域に集中し、下流に向かうほど密集している。今回調査を行った真ノ谷遺跡(第2図106)は、意宇川の支流である桑並川の中流域東側に形成された小支谷を最奥部まで進んだ突き当たりの斜面に位置している。

周辺の遺跡としては、古墳時代の遺跡がほとんどを占めるが、少し離れた南西にある熊野空山山頂に、前期旧石器と考えられる石器が出土した空山遺跡が存在する。掘斧、掘槍と推定される石器が、洪積層の崖面から検出され、また、玉髓や瑪瑙の半製品が道路の掘削面より採取されている。同遺跡からは縄文時代に属する石鏃や石匙が発見されており、縄文時代中期頃まで人々の生活の舞台となっていたことが認められている。しかし、本村では弥生時代前期・中期の遺跡、遺物はほとんど知られていない。

弥生時代後期の遺跡としては折原峠遺跡(101)が存在する。後世の掘削により大部分が失われているが、堅穴住居跡から九重式の壺が出土している。また、折原峠遺跡から100m北西に行った同丘陵には、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の堅穴住居跡5棟が見つかった折原上堤東遺跡第Ⅱ調査区(88)が位置する。

古墳時代前期の遺跡としては、3基の方墳からなる小原谷古墳群(22)が存在する。内部主体は箱式石棺、壺棺及び組合式木棺であり、副葬品としては3号墳の組合式木棺内から刀子1本と四蛇鏡1面が出土している。

中期以降の遺跡では増福寺古墳群(42)・土井古墳群(19)・増福寺裏山古墳群(41)などの古墳群が平野東の低丘陵上に分布している。増福寺古墳群は、辺6.0～14.5mの方墳26基によって構成されている。調査されたうち20号墳の西裾平坦面からは、古式の子持甕が出土し、古墳の時期を知る上で注目される。土井古墳群は、増福寺古墳群の北側に位置している古墳群で、辺7.0～11.0mの方墳13基によって構成されている。増福寺裏山古墳群は土井古墳群と同じ丘陵に立地し、辺10m前後の方墳8基から成り、まとまりをみせる。これらは尾根により便宜上3つに分けられているものの、本来は同一の群と考えられる。総数47基を数えるこれらの古墳群は、密集度において、松江市大阜町に在する西百塚山古墳群と同一の群をなしていたと考えられる八雲西百塚山古墳群(21)に次ぐものである。この時期の住居跡には、折原上堤東遺跡第Ⅰ調査区があげられる。方形の堅穴住居跡4棟が見つかり、このうちSⅠ-03からは住居内祭祀に使用された泥岩製有孔円板4点が出土している。

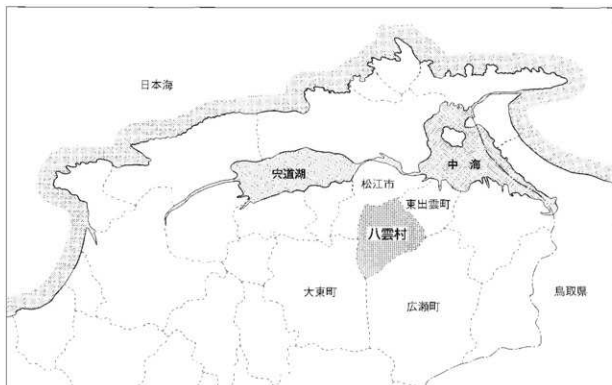
古墳時代後期に入ると、出雲地方東部に多い石棺式石室をもつ雨乞山古墳(1)が平野北東にそびえる雨乞山南麓に造られた。墳丘は現状で7.5×8.0m、高さ2.5mを測り、方墳と考えられる。意宇川下流

城の古墳の影響を受けたこの古墳は、八雲村最大規模の石室を有し、この地域の有力な家族の存在が窺われる。一方、家族墓的な性格をもつ横穴墓については四歩市横穴墓群(3)が、増福寺古墳群の南側の丘陵山腹に分布する。四歩市横穴墓群は、確認できる横穴だけで24穴を数え、平面プランはおおむね方形で、天井は九天井形をなしている。

奈良時代における当遺跡周辺は、『出雲国風土記』の意宇郡大草郷に属し、意宇川下流域の松江市大草町には出雲国庁や意宇郡家が置かれていた。

[参考文献]

『空山遺跡発掘調査概報』	八雲村教育委員会	1972年
『八雲村の遺跡』	八雲村教育委員会	1978年
『土井13号墳発掘調査報告書』	八雲村教育委員会	1979年
『脚崎谷遺跡・小屋谷古墳群発掘調査報告書』	八雲村教育委員会	1981年
『増福寺古墳群発掘調査報告書』	八雲村教育委員会	1981年
『増福寺古墳群発掘調査報告書』	八雲村教育委員会	1982年
『折原上堤東遺跡発掘調査報告書』	八雲村教育委員会	1994年
『折原峠遺跡終了報告』	八雲村教育委員会	1995年
『石棺式石室の研究』	出雲考古学研究会	1987年



第1図 八雲村位置図

Ⅱ 調査に至る経緯

八東郡八雲村は、交通網が未整備であり、特に、東西方向の交通には自動車のすれ違いに支障をきたすような狭小な村道を利用せざるを得ず、不便な生活を強いられている。更に、非常時における緊急車両の通行や災害発生時の交通確保などの不安も抱えている。

西岩坂地区一般農道は、こうした不安を抱える大石、桑並、東岩坂地区を結び、国道432号道路へ接続することで生活環境を改善し、あわせて集落を越えた農業受委託を促進させ農地の流動化を進めると共に、各種農業関連施設の利用を拡大し、集落間の交流を活発にすることを目的として整備されることとなった。

この事業に先立ち、平成8年1月12日に本農道の基礎資料作成のため鳥根県松江農林振興センターより八雲村教育委員会にて、起点となる熊野地区と終点の東岩坂地区での埋蔵文化財の有無についての照会があった。同年1月22日に分布調査を実施した結果、起点となる部分が高野横穴墓群(第2図18)と田中社跡(第2図56)をかすめる格好となることが判ったが、周囲に遺跡が密集している状況から現状での計画が最良であるとの結論に達した。

この結果に基づきルートが決定され、平成9年2月5日と2月10日の2日間をかけ、途中2.9km区間の分布調査を実施した。調査の結果、工事予定地内に周知の遺跡1カ所(田中社跡)、遺物散布地1カ所(反山遺跡として届出)、より詳細な試掘調査を必要とする地域15カ所を確認した。

この後、用地の買収に先行して地権者に了解を頂き、平成9年3月12日から3月19日にかけて遺跡の有無確認のための試掘調査を実施した。

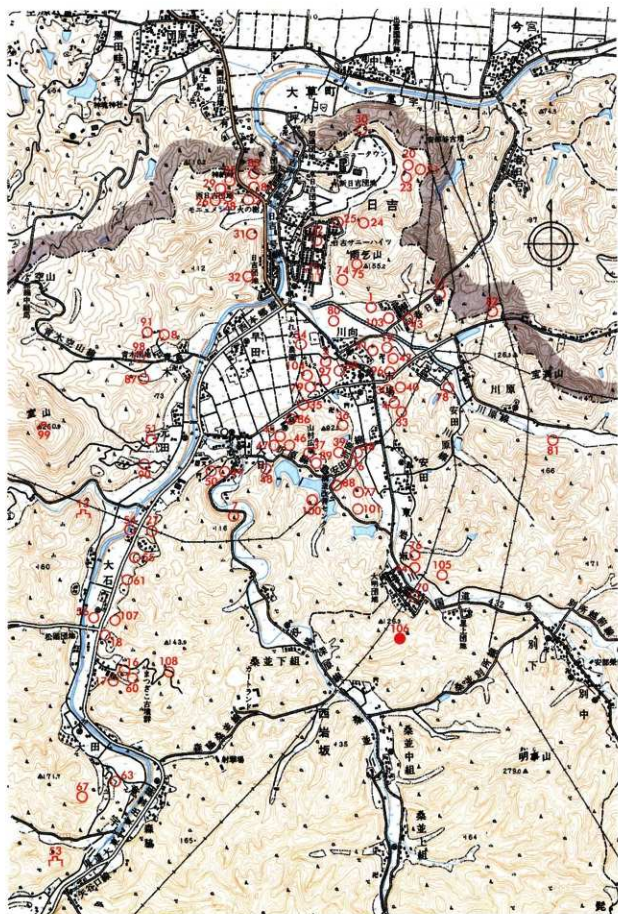
試掘調査により、T-2トレンチ(西岩坂4178番地)とT-11トレンチ(西岩坂3769-3番地)から多数の遺物が出土したため、当地の小学名をとりT-2周辺を瀬谷奥遺跡、T-11周辺を真ノ谷遺跡として文化財保護法上の手続きをとった。遺跡保護の協議がなされたが計画変更は困難との結論に達し、平成10年度から八雲村教育委員会が主体となり発掘調査を行うことになった。

Ⅲ 調査の経過

調査はまず、平成10年9月9日から9月21日にかけて遺跡の範囲確認のための試掘調査を実施し、この調査結果を基に調査区を設定した。同年9月21日午後より表土掘削を開始し、随時遺物の精査、遺物の取り上げを行った。

真ノ谷遺跡からは、落とし穴2個、加工段1段、焼土坑1個と多数のピットを検出し、12月8日に全体写真の撮影、12月9日から12月15日にかけて遺構の実測・地形測量、12月16日に撤収作業、12月17日に補足調査を行い現地での作業を終了した。

なお、調査は各グリッド単位に行い、東の交点をグリッド名とした。また、遺物の取り上げについてはグリッドの層位ごとに採取し、重要と思われる遺物については一点一点出土地点を実測して取り上げを行った。



第2図 位置と周辺の遺跡 (1 : 25,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

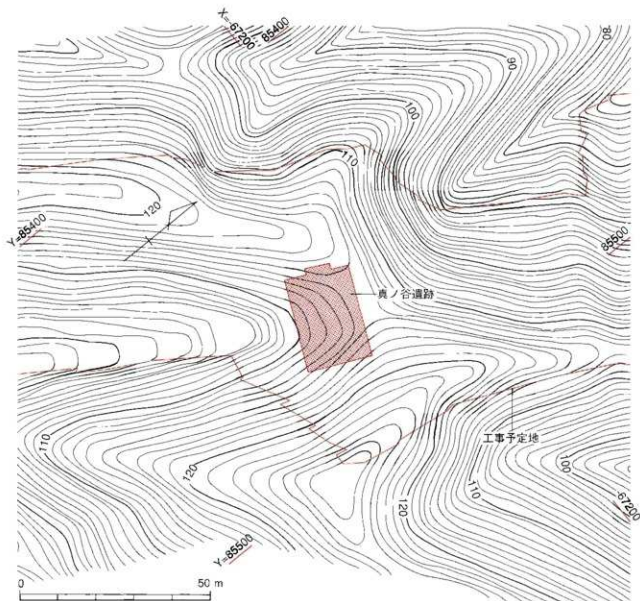
番号	名称	種別	概要	番号	名称	種別	概要
1	雨乞山古墳	古墳	方墳 石棺式石室	50	岩坂神社横穴墓群	横穴墓群	須恵器
2	岩坂陵墓参考地	古墳	円墳	51	古城遺跡	散布地	住居跡、縄文土器
3	四歩市横穴墓群	横穴墓群	28穴確認、須恵器	53	舛形山城	城跡	
4	高丸横穴墓群	横穴墓群	4穴確認	54	雲場古墳	古墳	
5	池ノ尻古墳	古墳	石棺式石室、須恵器	55	掛合遺跡	散布地	須恵器
6	安田横穴墓群	横穴墓群	2穴	56	田中社跡	神社跡	
7	岩屋口横穴墓群	横穴墓群	8穴	60	松遊遺跡	土壌裏	須恵器
8	青木橋穴墓群	横穴墓群	2穴確認	61	入石露跡	窯跡	須恵器
11	東岩坂要害山城跡	城跡	山城、石垣、酒蔵	63	恩部遺跡	散布地	須志器、土師器、黒曜石
13	入石城跡	城跡	山城	67	恩部山横穴墓群	横穴墓群	
16	松遊古墳群	古墳群	方墳1基以上	68	紙屋遺跡	散布地	磨製石斧
17	松遊横穴墓群	横穴墓群	8穴以上	70	御谷遺跡	散布地	酒蔵、大明団地
18	高野横穴墓群	横穴墓群	竈刀、鉄鏃、斧他	71	穴田遺跡	散布地	円筒埴輪、土師器
19	土井古墳群	古墳群	方墳13基	74	雨乞山古墳群	古墳群	方墳2基
20	大円寺上古墳群	古墳群	円墳2基	75	雨乞山遺跡	祭祀遺跡	土師器
21	八雲西百葉山古墳群	古墳群	方墳47基	76	細田古墳群	古墳群	方墳2基確認
22	小窪谷古墳群	古墳群	方墳3基、酒蔵	77	松ノ前古墳	古墳	方墳
23	大円寺遺跡	散布地	土師器	78	浜井場遺跡	散布地	須恵器、土師器
24	大谷古墳群	古墳群	方墳2基、子持壺	79	中山五輪塔群	古塔	石塔、現位置移動
25	御崎谷遺跡	散布地	須恵器、土師器、埴埴	80	戸波遺跡	住居跡他	須志器、陶磁器、漆器
26	神納遺跡	散布地	須恵器、土師器	81	屋敷谷五輪塔群	古塔	五輪塔
27	松遊遺跡	散布地	須恵器、土師器他	82	善三郎谷横穴墓群	横穴墓群	8穴
28	神納横穴墓	横穴墓		83	善井古墳群	古墳群	方墳10基確認
29	神納古墳群	古墳群	3基	84	落月東横穴墓群	横穴墓	1穴開口
30	和田平横穴墓群	横穴墓群	3穴、黒汝	85	落井西横穴墓群	横穴墓群	11穴以上
31	岩海古墳群	古墳群	方墳1基、円墳1基	86	禪定寺遺跡	住居跡	陶磁器、須恵器、石帯
32	勝負谷古墳群	古墳群	方墳2基、円墳2基	87	青木谷遺跡	散布地	須恵器、土師器、勾玉
33	高丸古墳群	古墳群	円墳2基	88	折原上堤東遺跡	住居跡	竈穴住居、掘立柱建物跡
34	山崎遺跡	散布地	須恵器	89	折原中堤北遺跡	散布地	須恵器
35	中山古墳群	古墳群	方墳3基	90	上元川遺跡	散布地	須志器、土師器、黒曜石
36	谷ノ奥古墳群	古墳群	方墳2基、円墳1基	91	椎木谷遺跡	散布地	須恵器、土師器
37	北折原遺跡	古墳他	方墳1基、横穴2穴	96	増福寺横穴墓群	横穴墓群	2穴確認
38	安田古墳群	古墳群	円墳2基	97	前川遺跡	祭祀遺跡	自然河川跡、木製琴
39	外輪谷横穴墓群	横穴墓群	12穴、刀	98	青木遺跡	住居跡	竈穴住居、掘立柱建物跡
40	四歩市古墳群	古墳群	方墳6基	99	雲山城跡	城跡	
41	増福寺裏山古墳群	古墳群	方墳8基	100	折原中堤遺跡	住居跡	竈穴住居跡、土師器
42	増福寺古墳群	古墳群	方墳26基	101	折原神遺跡	住居跡	竈穴住居跡、弥生土器
43	原ノ前横穴墓群	横穴墓群	須恵器、鉄器	103	赤坂遺跡	散布地	須恵器、土師器
44	細川横穴墓群	横穴墓群	平入家形	104	中山遺跡	散布地	須恵器、土師器
45	禪定寺横穴墓群	横穴墓群	6穴	105	宮谷遺跡	生産遺跡	炭灰跡
46	禪定寺古墳群	古墳群	方墳10基	106	真ノ谷遺跡	住居跡	加工段、落とし火
47	折原横穴墓群	横穴墓群	3穴	107	反田遺跡	散布地	須志器
48	折原下堤遺跡	散布地	須志器、土師器	108	巖谷遺跡	散布地	土師器
49	大村堂横穴墓群	横穴墓群	4穴確認、須恵器				

Ⅳ 遺跡の概要

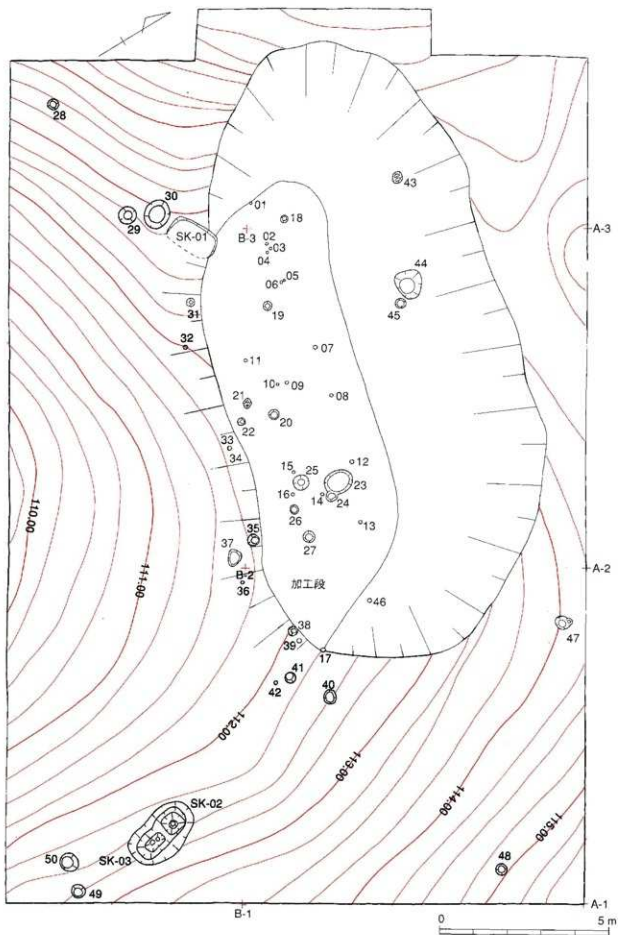
真ノ谷遺跡は、標高80～127mを測る低丘陵に挟まれた幅約20～50m、長さ約600mの小支谷を最深部まで進んだ突き当たりの緩やかな斜面に位置している。この斜面を越えた反対側は切り立った斜面となっており、それがそのまま東岩坂川へと続いている。また、長さ600mの小支谷は近年まで谷水田として利用されていた。

今回の調査では、平面が「U」字形を呈する突き当たりとなった斜面から、落とし穴2個、加工段1段、焼土坑1個と多数のピットを検出した。出土遺物としては、石器8点、弥生土器9点、土師器237点、土師質土器68点、鉄器1点、焼土1277個(4245g)と多量の炭化物が出土している。

調査地の基本的な層序は、地山の上に砂を多く含んだにべい褐色を呈する土が堆積し、この上に浅く腐葉土がのっている。



第3図 調査区配置図



第4图 遺構位置图

1. 加工段 (第 5 図)

立 地

調査区の標高111.75～115.75mを測る南向きの斜面で検出された加工段である。斜面上側は馬の背状の痩せ尾根となっており、この尾根を利用する格好で加工段を削りだしている。尾根を挟んで反対は切り立った斜面で、それがそのまま東岩坂川へと続いている。

形 態

斜面上側にあたる北側部分をカットして平坦面を作り出しているが、斜面下側にあたる南側の平坦面は流失している。規模は現状で、比高差最大2.715m、平坦面の長軸11.80m、短軸3.94m、面積47.9㎡を測る。ここからビット10個と一回り小さな小ビット17個を検出した。

ビ ッ ト

平坦面から直径19.8～84.0cm、深さ最大8.2～22.2cmを測る柱穴と考えられる10個のビットを検出したが、散在的で建物跡を復元するには至らなかった。

小ビット

ここでは上縁径が小さなものを小ビットとして別個に記載することとした。規模は直径5.5～14.0cm、深さ最大3.9～15.8cmを測り、大部分の底部は「V」字状に尖っている。

埋土は地山と非常によく似ているため判り辛かったが、底部付近から炭化物が出土するため検出することができた。炭化物の中には柱材と考えられるものがあり、焼した何らかの施設であったと考えられる。加工段の壁下と平行に並んでいることから、小ビットは櫓状の施設であり、住居跡は加工段のさらに南側にあり、既に流失してしまった可能性が考えられる。あるいは、枕状の小ビットによる簡易な小屋状の建物があつたのかもしれない。

土層堆積状況

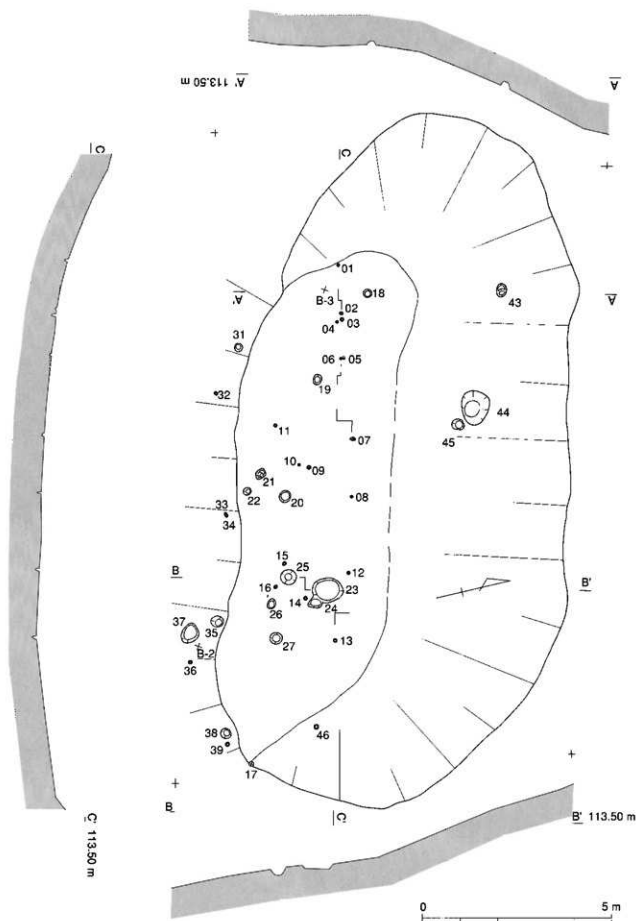
加工段の基本的な層序は、地山の上に非常に多くの炭化物を含んだにぶい褐色を呈する土が堆積し、この上に浅く腐葉土がのっている。

遺物出土状況 (第 6 図)

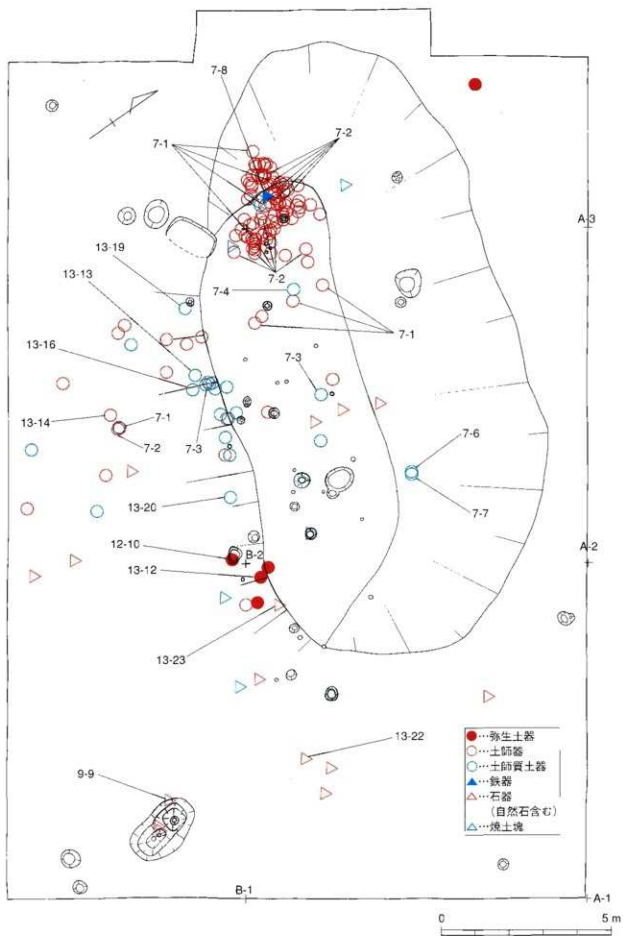
加工段の平坦面からは土師器126点・土師質土器16点・鉄器1点と黒曜石3点が出土し、特に北西側の壁下に密集していた。また、焼土1144点(4182g)が出土した。

出土遺物 (第 7 図)

土師器 (1)は「く」の字に屈曲する口縁をもつ甕で、復元口径27.0cmを測る。口縁が短く立ち上がり端部に面を有する。内外面ともにヨコナデ調整で、ヘラケズリは施されていない。色調は橙色であり、外面の一部は炭化物が付着し黒色を呈する。土師器は全体で237点出土しているが、その殆どがこの甕と、後述する第7図2、第13図13の胴部の破片である。(2)は「く」の字に屈曲する口縁をもつ甕で、復元口径26.0cmを測る。口縁は短く立ち上がり、端部は平坦な部分と丸くおさめる部分がある。(1)と非常に良く似た形であるが、内面頸部以下に浅いヘラケズリが施されている。色調は灰黄褐色であり、外面の一部は煤が付着し黒色を呈する。



第5圖 加工段実測圖



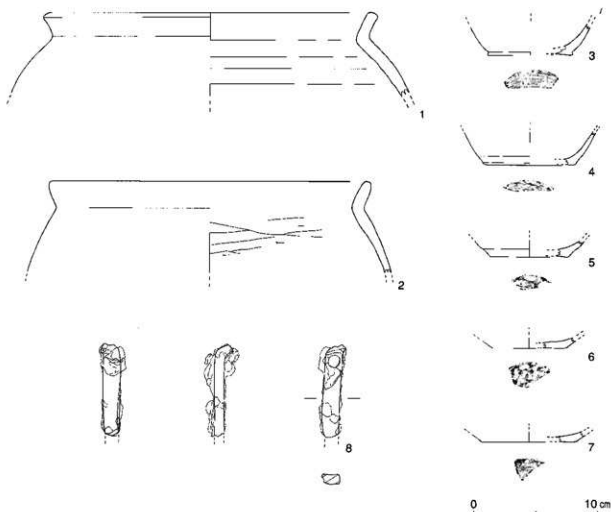
第6図 遺物出土状況

土師質土器 (3・4・5・6・7) は底部の破片であり、いずれにもふい黄褐色を呈する。切り離しには回転糸切りが行われ、無調整のままである。形態の特徴としては底部近くに段が付くもの(3)、弱いアクセントが付くもの(4・5)、素直に立ち上がるもの(6・7)がある。底部近くに段が付くものと弱いアクセントが付くものは同一の個体となる可能性があるが、完形に復元できる個体がなく、はっきりしたことが判らなかつたため別個のものとした。底径は、復元でそれぞれ6.8cm、7.4cm、6.2cm、5.8cm、7.7cmを測る。

鉄器 (8) は一方の端が折り曲げられた鉄釘で、断面長方形を呈する。法量は長さ7.7cm、幅1.2cm、厚さ0.8cm、重量40.5gを測る。

焼土 加工段の平坦面から満遍なく出土している。この中には拳大の大きさのものもあり、一見炉壁を思わせる。製鉄遺構の可能性もあり、焼土や炭化物が密集する場所とピット内の土を水洗いしたが、鍛造剥片・鉄滓等は見つからなかつた。

SK-01の埋土中のもを除くと1144点(4182g)が出土し、この内28点(656g)からは、すさの痕跡が認められた(図版7)。このことから焼土は住居の壁土であり、これが火災等で、火を強く受け堅くなったものか、製炭施設の炉壁であった可能性が考えられる。



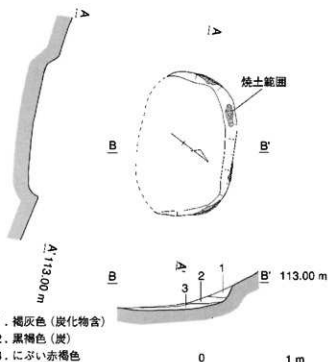
第7図 加工段出土遺物実測図

2. SK-01 (第8図)

調査区の標高112.50~113.00mを測る南東向きの斜面で検出された焼土坑である。加工段と切り合う格好で検出され、新旧関係は加工段(古)SK-01(新)である。

斜面下となる南東側の壁は検出されなかったが、底部に残った炭跡から平面形は楕円形と考えられる。規模は現状で、上縁の長軸151cm、底部長軸137.0×短軸91.0cm、深さ最大18.9cmを測る。壁面は火を受け、所々に赤褐色の焼土が残る。

腐葉土層を取り除いたごく浅い場所を確認できたため、古い時期のものではないと考えられる。形態などから小炭を焼くために使われた穴と思われる。



第8図 SK-01実測図

3. SK-02 (第10図)

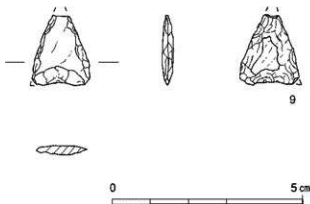
調査区の標高112.25~113.00mを測る南西向きの斜面で検出された落とし穴である。SK-03と切り合う格好で検出されたが、全く同じ土壌のため新旧関係を知ることが出来なかった。あるいは、どちらかの土坑が埋まりきらないうちに拡張する格好で造られたものかもしれない。平面形は、上部は不明であり、底部は隅丸方形を呈する。壁は急角度に掘り込まれ制限り状を呈し、底部は平坦で、中央には径23.0cm、深さ32.0cmの穴が掘り込まれている。規模は上縁の短軸114cm、底径52.5×62.5cm、底部から肩部までの深さ最大139.5cmを測る。

遺物としては、SK-02を検出した地山面から石鏃1点が出土したが、本遺構に伴うものかは不明である。

SK-02 出土遺物 (第9図)

(9)は、SK-02の精査時に埋土と地山の境界付近から出土した安山岩製の石鏃である。

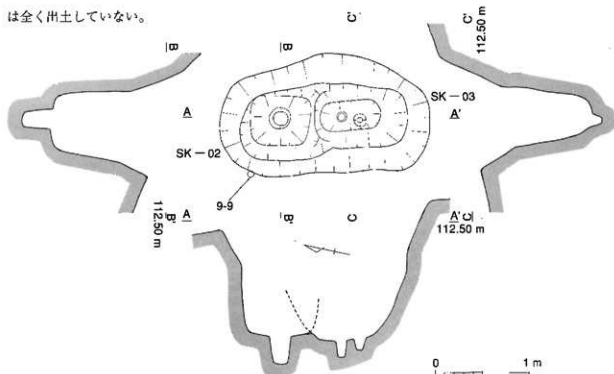
二等辺三角形を呈し、基部にはわたぐりを意識した加工が施され、浅く窪む。両面共に素材面を残し、周縁部に二次加工が施される。端部を欠いているが、現状で長さ1.85cm、幅1.55cm、厚さ0.26cm、重量0.8gを測る。



第9図 SK-02 出土遺物実測図

4. SK-03 (第10図)

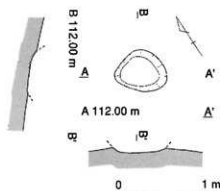
調査区の標高112.25～113.00mを測る南西向きの斜面で検出された落とし穴である。平面形は、上部は不明であり、底部は隅丸の長方形を呈する。壁は急角度に掘り込まれ胴張り状を呈し、底部は断面「U」字形で、径11.0cm・深さ13.0cmと径13.0cm・深さ13.1cmを測る2つの穴が掘り込まれている。規模は上縁の短軸125.0cm、底部長軸63.5×短軸31.5cm、底部から肩部までの深さ最大164.6cmを測る。遺物は全く出土していない。



第10図 SK-02・03実測図

5. Pt-37 (第11図)

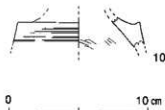
加工段の北側、調査区の標高111.50～111.75mを測る斜面で検出されたピットである。規模は上縁の径43.5～51.0cm、底径31.5～40.0cm、深さ最大8.4cmを測るごく浅いものである。遺物としては、埋土中より弥生土器の破片が出土している。



第11図 Pt-37実測図

Pt-37出土遺物 (第12図10)

(10)は器台脚部の破片で、色調はにぶい橙色を呈する。外面に擬凹線文が見られるが、風化のためはっきりしない。内面の一部にはヘラミガキが認められる。Pt-37の周囲からは後述の第13図(11・12)を含め弥生土器の破片が7点ほど出土している。いずれも器台の破片と考えられ同一個体かもしれない。



第12図 Pt-37出土遺物実測図

6. 遺構外出土遺物 (第13図)

遺構外出土の遺物として弥生土器 8 点、土師器 111 点、土師質土器 52 点、石器 4 点の取り上げを行った。このうち実測が可能な 13 点を図示している。

(11・12) は Pt-37 付近からの出土であり、(11) は B-1 区 (B-2 杭付近) におい褐色土層、(12) は A-1 区 (B-2 杭付近) におい褐色土層より出土した。(13・14・15・16・19・20) は加工段平坦面の下側にあたる B-2 区におい褐色土層から出土したものである。おそらくは平坦面より流出したものであろう。(17・18) は A-2 区におい褐色土層、(21) は B-2 区地山直上より出土した。

(11) 弥生土器の破片であり、器台の口縁端部と思われる。外面には擬凹線文が施され、内面の一部にヘラミガキが観察できる。色調はにおい黄褐色を呈し、復元口径 19.0 cm を測る。

(12) 弥生土器の器台脚部の破片であり、色調はにおい橙色を呈する。外面に沈線が見られるが風化のためはっきりしない。内面にはヘラミガキが認められる。

(13) 「く」の字に屈曲する口縁をもつ甕であり、復元口径 21.0 cm を測る。第 7 図 (1) (2) と比べると口縁の立ち上がりが短く、器壁も薄い。調整は内外面ともにヨコナデで、色調は橙色を呈する。

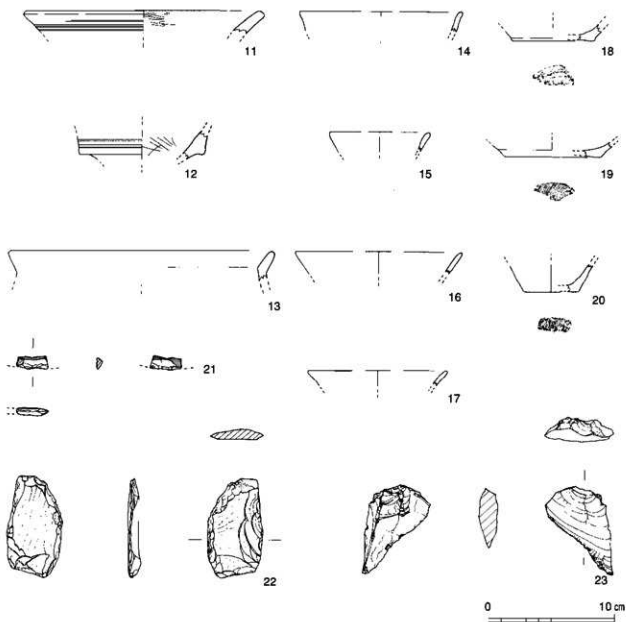
(14・15・16・17) 土師質土器口縁部の破片であり、におい黄橙色を呈する。形態の特徴としては口縁部が僅かばかり屈曲するもの (14・15) と直線的に端部に至るもの (16・17) がある。小片のため口径を復元することは出来なかった。

(18・19・20) 土師質土器底部の破片であり、いずれもにおい黄褐色を呈する。切り離しには回転糸切りが行われ、無調整のままである。形態の特徴としては底部近くに段が付くもの (18)、弱いアクセントが付くもの (19)、素直に立ち上がるもの (20) がある。底部近くに段が付くものと弱いアクセントが付くものは同一の個体となる可能性があるが、完形に復元できる個体がなく、はっきりしたことが判らなかつたため別個のものとした。底径はそれぞれ 6.7 cm、7.6 cm、4.2 cm を測る。

(21) 削器と考えられる刃部部分の破片である。両面から剥離調整を施し、刃部として^(図11)いる。石材はトカライトである。

(22) A-1 区褐色土層より出土したトカライト製の削器である。素材の側縁に両面から二次加工が施されている。刃部は弧状を呈し、特に裏面には細かい連続的な調整が加えられる。最大長 8.0 cm、幅 4.4 cm、厚さ 0.94 cm、重量 36.3 g を^(図21)測る。

(23) A-1 区におい赤褐色土層より出土した無産品質流紋岩の剥片である。先端が尖り気味の不定三角形の剥片で、最大長 7.6 cm、幅 4.5 cm、厚さ 1.5 cm、重量 37.0 g を測る。先端付近と縁辺の一部に細かな加工が見られる。背面には腹面と同方向の小さな剥離痕が重なっており、また、腹面の打面が見られないことから、基部を意識した何らかの加工を施しているかもしれない。時期は不明だが、旧石器時代に遡る可能性も^(図3)ある。



第13図 遺構外出土遺物実測図

[註]

- (1) 丹羽野裕氏のご教示を得た。
- (2) 註1に同じ。
- (3) 丹羽野裕氏に実測を依頼し、原稿も執筆いただいた。

V 小 結

今回の真ノ谷遺跡の調査では、小支谷を最深部まで進んだ突き当たりの斜面から、落とし穴 2 個、加工段 1 段、焼土坑 1 個、ビット 26 個と一回り小さな小ビット 24 個を検出した。ここでは遺構の時期について若干触れ、まとめたい。

落とし穴は、調査区東側の山頂から続く急斜面がやや緩やかになる変換点に切り合って位置する。遺物としては、SK 02を検出した地山直上より石鏃(第 9 図 9)が出土しているが、細かい時期は判らない。遺構外からではあるが削器(第13図21・22)が出土し、これらが落とし穴に近い時期のものであろう。

次にビットであるが、焼土・炭化物以外の遺物が出土したのはPt-37だけであった。弥生時代後期中葉の九重式併行期と考えられる器台底部の破片が出土し、周辺からも器台の破片が見ついている。ビットは全体で 26 個検出しているが、型上や並びで同時期のビットを選び出すことはできなかった。

加工段からは、ビット 10 個と一回り小さな小ビット 17 個を検出したが、建物跡を復元するには至らなかった。遺物は北西側の壁下からまとまって出土し、実測できたものに土師器の甕、土師質土器、鉄釘がある。土師質土器は古代末から中世初頭。土師器の甕は土師質土器と同時期と考えられるが、古墳時代中期の可能性もあり、2 時期の遺構が重複しているのかもしれない。

最後に焼土坑であるが、腐葉土層を取り除いたごく浅い場所で確認できたため、さほど古い時期のものではなく、近世以降の小炭を焼くための穴と思われる。

以上のように真ノ谷遺跡は、落とし穴から近世以降と考えられる焼土坑に至るまで非常に時期幅のある遺構が検出された。しかし、遺構や遺物の量は少なく、継続性はない。それぞれが短期間の内に廃絶されたものと思われる。

八雲村内での遺跡のあり方は、その殆どが平野と川を取り囲む地域に集中している。今回の真ノ谷遺跡は、いわば遺跡の空白地帯である山頂部に存在した。総面積の 80% 以上がこのような山林で占められる八雲村を考えると、同じような遺跡が分布するものと思われ、今後の文化財の調査に有効な資料となるであろう。

第2表 真ノ谷遺跡土坑一覧表

単位 (cm)

掘回番号	遺構番号	平面形	区	上面 (長軸×短軸)	深さ最大	備考
第8回	SK-01	隅丸方形	B-2.3	151×	18.9	焼土坑
第10回	SK-02	隅丸方形か	B-1	221 (SK-03と重なった長さ) × 114	139.5	溝とし穴
第10回	SK-03	楕円形か	B-1	221 (SK-02と重なった長さ) × 125	164.6	溝とし穴

第3表 真ノ谷遺跡ピット一覧表

単位 (cm)

Pt.番号	上面 (短軸×長軸)	底面 (短軸×長軸)	深さ最大	検出地点	備考
01	8.0×10.0	3.8×5.0	8.8	加工段平坦面	小ピット
02	6.0×11.0	3.5×9.5	4.3	加工段平坦面	小ピット
03	8.0×9.5	2.6×3.6	13.8	加工段平坦面	小ピット
04	5.5×6.0	2.8×3.5	10.1	加工段平坦面	小ピット
05	8.0	3.0×3.2	5.2	加工段平坦面	小ピット
06	5.5×7.0	2.5×3.0	3.9	加工段平坦面	小ピット
07	9.0×14.0	3.5×5.8	8.2	加工段平坦面	小ピット
08	7.0×8.5	3.5×3.8	9.5	加工段平坦面	小ピット
09	8.5×9.0	3.0	15.8	加工段平坦面	小ピット
10	7.3	3.5	6.4	加工段平坦面	小ピット
11	7.3×8.0	3.5×4.5	7.5	加工段平坦面	小ピット
12	8.0	3.5×5.0	10.3	加工段平坦面	小ピット
13	8.0×11.0	4.5×5.0	13.4	加工段平坦面	小ピット
14	8.0×10.0	3.5×5.0	6.5	加工段平坦面	小ピット
15	9.0×9.5	3.5×4.5	11.4	加工段平坦面	小ピット
16	7.5×8.0	2.5×3.2	11.2	加工段平坦面	小ピット
17	9.0×10.0	3.5	13.9	加工段平坦面	小ピット
18	20.5×23.0	14.5×15.0	10.7	加工段平坦面	
19	21.5×28.0	12.5×17.3	8.6	加工段平坦面	小ピットか?
20	31.3×36.0	21.7×22.8	13.0	加工段平坦面	
21	20.5×31.0	11.2×不明	20.4	加工段平坦面	木の根か?
22	19.8×21.0	10.0×11.0	12.0	加工段平坦面	
23	68.0×84.0	55.0×64.0	13.4	加工段平坦面	
24	30.0	16.0×26.0	8.2	加工段平坦面	
25	40.0×43.0	14.0×19.0	22.2	加工段平坦面	焼土出土
26	20.5×29.5	15.0×29.2	13.5	加工段平坦面	
27	30.5	19.5×23.8	15.8	加工段平坦面	焼土出土
28	31.0×34.0	19.5×21.0	17.4	B-3区	
29	48.5×53.0	22.0×25.5	30.8	B-3区	
30	71.0×87.0	41.0×50.1	53.2	B-3区	
31	18.5×22.0	13.0×14.5	18.6	B-2区	
32	9.5×10.5	5.0×6.0	3.0	B-2区	小ピット
33	4.8×13.5	2.2×3.0	4.5	B-2区	小ピット
34	7.5	3.8×6.0	8.0	B-2区	小ピット
35	26.5×33.0	17.8×18.0	26.1	B-2区	
36	9.5	3.7×4.2	10.6	B-1区	小ピット
37	43.5×51.0	31.5×40.0	8.4	B-2区	弥生土器出土
38	25.0×29.0	16.0	21.7	A-1区	
39	9.0×12.0	4.0×5.5	7.5	A-1区	小ピット
40	35.0×38.0	25.0×31.0	9.6	A-1区	焼土出土
41	28.0×31.0	13.0×18.0	48.6	A-1区	木の根か?
42	8.0×10.0	2.5×3.5	11.5	A-1区	小ピット
43	25.5×35.5	10.5×15.5	15.2	加工段斜面	木の根か?
44	79.0×91.0	38.5×43.0	45.6	加工段斜面	
45	30.0×36.5	16.3×16.7	51.7	加工段斜面	
46	12.0	5.0×5.5	9.6	加工段斜面	小ピット
47	42.0×43.0	19.5×25.3	20.8	A-1区	木の根か?
48	26.0×31.0	18.0×19.2	19.0	A-1区	
49	37.0	21.0×22.0	22.9	B-1区	木の根か?
50	50.0×51.0	30.0×31.0	33.2	B-1区	木の根か?

圖 版



遺跡周辺空中写真

図版 2



調査区全景 (空中写真)



調査区全景 (西より)

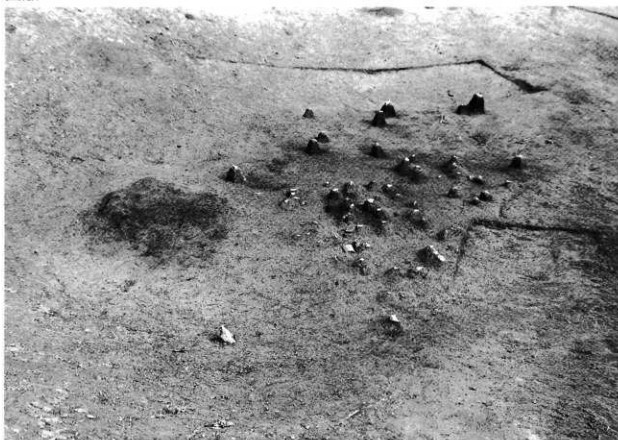


発掘調査前全景（西より）

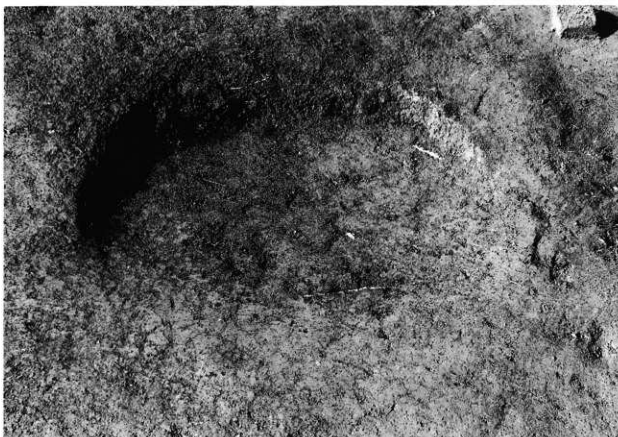


加工段全景（西より）

図版 4



加工段遺物出土状況 (西より)



S K-01 全景 (南東より)

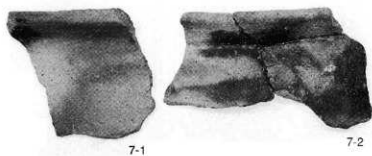


S K-02・03 全景 (北西より)

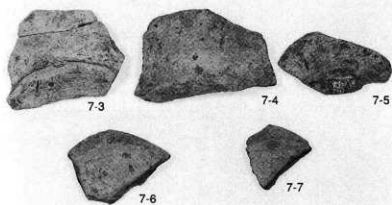


発掘作業風景

図版 6



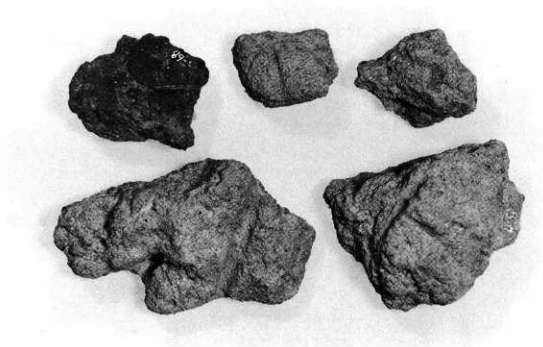
加工段出土土師器



加工段出土土師質土器



加工段出土鉄器



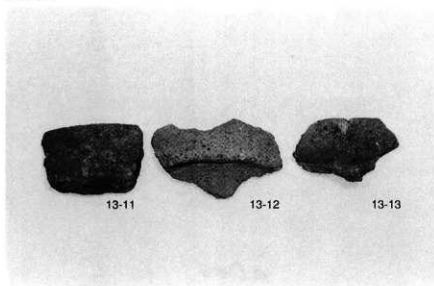
すさの痕跡が残る焼土



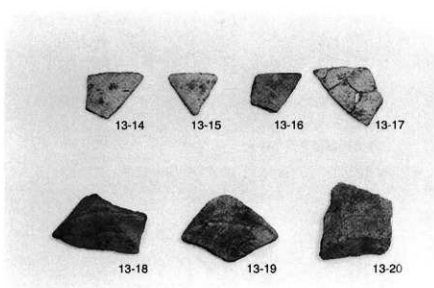
9-9

12-10

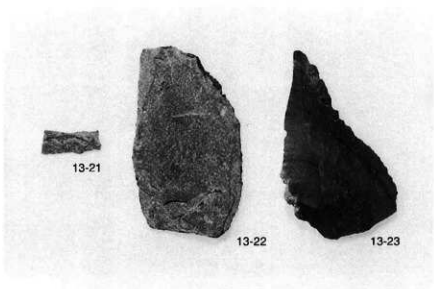
図版 8



遺構外出土弥生土器・土師器



遺構外出土土師質土器



遺構外出土石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	まのたにいせきはつくつちょうさほうこくしょ				
書名	真ノ谷遺跡発掘調査報告書				
副書名	西岩坂地区一般農道整備事業に伴う				
巻次	八雲村文化財調査報告 17				
編集者名	川上昭一				
編集機関	八雲村教育委員会				
所在地	〒690-2103 鳥根県八束郡八雲村大字西岩坂316番地 TEL (0852) 54-2478				
発行年月日	平成12 (2000) 年3月31日				
所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	調査面積 (m ²)
		市町村	遺跡		
真ノ谷遺跡	鳥根県八束郡 大字西岩坂	32305	F106	19980909~ 19981217	436
調査原因	西岩坂地区一般農道整備事業に伴う事前調査				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
真ノ谷遺跡	住居跡?	弥生時代 時期不明	落とし穴2穴 焼土坑1個 加工段1段	石鏃・石器・ 土師器・土師 質土器・鉄器・ 弥生土器	焼失住居?

真ノ谷遺跡

平成12(2000)年3月

発行 八雲村教育委員会
島根県八束郡八雲村大字西岩坂316番地
印刷 株式会社 島根県農協印刷
島根県松江市浜乃木二丁目10番52号
